先人たちはいかに外国語と外国文化を学んできたのか
－ドイツ語を中心にして－

梅　澤　知　之

1　はじめに

入試に備えて、英語もほどほどに勉強してきたので、大学では、英語以外の外国語も積極的に取り組んでみようと考えていた。そこで第1外国語をドイツ語、第2外国語を英語とするクラスを選択した。ところがクラスのなかの何人かは、すでに高校時代にドイツ語やフランス語を学習してきていることがわかり、恐れ入った。また英語にしても、授業のテクストが、こちらのレベルを超えた英文学作品であり、思うように読解できないことにショックを受けた。その上、高校時代にアメリカへの留学経験があり、英語の実力がかなり違う学生もいた。しかし同級生はほぼ全員基本的に楽天的だった。みな負けじと新たな外国語に挑戦するのが当たり前になった。1年で新しい外国語1つは最低限であり、それ以上に2つ3つと幅を広げていくものもいた。最初はただがむしゃらに勉強するだけであった。多くは英語、ドイツ語、フランス語から入っていたが、筆者はルネサンスへの関心から、英語、ドイツ語の次にイタリア語を勉強し始めた。しかしいつも学習方法を模索していた。

そんな折、仲間内で話題になったのが、仏教学者であり、語学にも造詣の深い渡辺照宏（しょうこう）（1907-1977）の岩波新書の1冊[1]であった。執筆当時、渡辺は55歳、「大学を出てヨーロッパの3年の留学をすませ」、[2]「ひととおり文法を読み、辞書の使い方を心得ている外国語の数は30をこえました」[3]と言いながら、次のように書いている。

> 実を言うと、多少はやったつもりだと人前で言えるのはドイツ語とサンスクリットぐらいなものです。このふたつだけは20歳前後からほとんど1日も休まずに、こんにちでも勉強を続けています。[4]

このような語学の達人が、また次のように言う。

> 私は自分が外国語が得意であるなどと、ただの一度も考えたことはありません。私が直接に存じ上げていた、また現在も存じ上げている恩師・先輩・学友・または年下の友だちで、私が足許にもおよびつかないほど外国語の達者な方がなんにんもいます。私はそういう方々から勉強の方法を学び、今でも絶えず指導を仰いでいます。この本を書くにあたっても、自分で確かでないことは、そういう方々のご意見を何度となくうかがいました。[5]

そして外国語の学び方について、このように言う。

> 真理はいつもきわめて単純なものです。学び方といっても特別に軽便な方法があるわけではなく、根気よく勉強する以外には道がないという、わかりきったことを説明したのがこの本です。[6]

この書物には、ずいぶん元気づけられて、その後も時間の許す限り、新しい外国語に挑戦することになる。フランス語、現代ペルシャ語、アラビア語、ラテン語、そしてほんの少し垣間見たのが、トルコ語、古典ギリシア語であった。するとだんだん外国語を勉強する要領がつかめてくる。ドイツ語からイタリア語に比べ、イタリア語からフランス語はずいぶん楽に感じられる。またドイツ語から現代ペルシャ語は、互いに似ていて、とっつきやすい。アラビア語は、全く系統が違い、最難関である。ラテン語は、当然のことながら、イタリア語、フランス語の後ではやりやすい。トルコ語は、日本語母語話者には、比較的楽である。音声による学習が少なかったイタリア語と現代ペルシャ語は、あっという間に忘れてしまった。中学1年生から学習している英語だが、例外が多く、現代ヨーロッパ諸語のうちでも、むずかしい部類に入る。日本語母語話者が苦労するはずである。ここから体験的にいろいろなことがわかった。いずれも当たり前のことばかりだが、列挙する。1）同じ系統の言語は学習速度が早い。2）外国語の学習は、母語に左右される。3）音声による記憶は外国語学習に必要である。4）そのためできれば留学が望ましい。その後紆余曲折を経て、筆者は近代ドイツ文学を専攻するドイツ語教師となる。

2　対馬藩の儒者雨森芳洲（1668-1755）

姫路獨協大学に奉職して数年後、ある書物に出会う。上垣外憲一の芳洲に関する本[7]である。氏はもともと比較文化・18世紀ヨーロッパ思想を専攻していたが、その後日韓文化交流史に手を染めていた。筆者も18世紀ドイツ文学を専攻していたので、同じ関心から本屋でこの書物を手に取ることになる。

芳洲は、1668年（寛文８年）、町医者の子として、現在の滋賀県長浜市高月町に生まれた。当初京都で医者修行を始めるが、やがて江戸に出て、木下順庵（1621-1698）門下に入る。同窓に新井白石（1657-1725）などがいる。1689年（元禄２年）、師の推挙で対馬藩に仕えることになる。しかしすぐに対馬に渡るわけではなく、対馬藩江戸藩邸にあって、引き続き師のもとで勉学に励んでいた。この時期芳洲は、漢文のみならず、唐話すなわち中国語会話を習い始めている。1692年（元禄５年）、長崎で中国語会話を学ぶ機会が与えられる。1693年（元禄６年）対馬に赴任する。しかし1696年（元禄９年）から1698年（元禄11年）まで再び長崎で中国語会話を学ぶ機会が与えられる。当時儒者の間で、漢文のみならず現代中国語の学習が一つの流行となっていた。さて芳洲は1698年（元禄11年）対馬に戻り、朝鮮方佐役を拝命する。対馬藩では、対朝鮮外交が最重要業務であり、朝鮮外交を担当する役所が朝鮮方、その責任者である頭役には、家老クラスが任命される。佐役はその補佐役であり、外務事務次官に当たる。ここで芳洲は慣れない実務に励むことになる。1702年（元禄15年）、芳洲は30歳半ばにして初めて釜山に渡る。このとき彼は朝鮮語学習の重要性に気づく。朝鮮の役人はみな漢文の達人であり、筆談も可能であるが、実際の外交は現地の言葉ができる方がより好ましい。芳洲はいったん対馬に帰り、朝鮮語の下準備をした上で、翌1703年（元禄16年）釜山の倭館に赴き、1705年（宝永２年）まで足かけ３年朝鮮語の学習に励む。その結果、朝鮮語は日本語とほぼ文法が同じで、中国語に比べれば、はるかにやさしいことがわかる。しかし辞書も教科書もない中での学習が困難であったことは想像に難くない。芳洲は毎日訳官たちのもとに出かけて、すさまじい程に勉学に励む。

> 夏の炎天下、勉強してきた言葉を書き写している時には、目のくらんだときもあったけれども、「命を五年縮め候と存じ候はば、成就せざる道理やあるべきと存じ、昼夜油断なく相勤め候」と書いている。[8]

この頃芳洲は、朝鮮での日本語辞典『倭語類解』の作成に協力、また朝鮮語

教科書『交隣須知』を作成している。その後語学、学識及び実務能力を生かして、1711年（正徳元年）と1719年（享保４年）の２度にわたり、朝鮮通信使に随行して、江戸を往復、接遇に活躍する。1721年（享保６年）朝鮮方佐役を辞任する。その後芳洲は長い晩年を思索と教育に過ごす。1728年（享保13年）に『交隣提醒』を著して、対馬藩主に対朝鮮外交の心得を説く。また1735年（享保20年）には、藩主に藩政に関する上申書『治要管見』を提出、学問と学校教育の重要性ならびに外交における教養ある通訳の必要性を説いた。そして1755年（宝暦５年）87歳の生涯を閉じた。その一生は、あくことなき勉学と不断の努力であった。

3　幕末の獨逸語学習―蘭語から獨逸語へ

さて、時代も下り、幕末にいたってようやく日本におけるドイツ語学習が始まる。[9] 市川兼恭（通称斎宮）（1818-1899）と加藤弘之（1836-1916）である。市川は安芸国（広島県）の人、父は広島藩医であった。大坂の緒方洪庵の適塾、さらに江戸に出て、杉田成卿の塾で蘭語を学ぶ。蕃書調所教授職手伝、開成所教授職、維新後、新政府に仕え、京都兵学校教授方、大阪兵学寮教授等を歴任、獨逸語の学習と教授、近代科学・技術の教育を行った。

加藤弘之は、但馬国（兵庫県）出石藩出身、父は甲州流兵学師範。江戸にて佐久間象山の門に入る。のちに大木仲益の塾に入り、蘭学を修める。蕃書調所教授職手伝として、蘭語の教授と翻訳に従事、市川兼恭の養女と結婚、兼恭とともに獨逸語を学ぶ。開成所教授職、維新後、新政府に召し出され、役職を歴任する。開成学校（のちの東京大学）綜理、帝国大学（現在の東京大学）総長となる。獨逸学協会学校第３代校長。法律、政治学を中心に、啓蒙家として活躍する。

市川と加藤は1860年（万延元年）幕命により、蕃書調所において、獨逸語の学習を始める。オランダ文と対訳したドイツの文法書などを参考にしながら研鑽に励んでいる。ただし彼らの獨逸語は、蘭語臭が抜けきらず必ずしも十分ではなかった。

4　幕末から明治初めの日独交流

欧米、特にドイツと関わる使節団を見ることにする。[10]

まず文久遣欧使節団である。幕府は、1862年（文久２年）使節団をヨーロッ

パに派遣した。一行は、オランダ経由でプロシア（ベルリン等）、ロシア（サンクト・ペテルブルク）を訪問、帰りにフランス、ポルトガルに寄ったのち、同年帰国した。正使外国奉行兼勘定奉行竹内保徳（下野守）以下37名であった。翻訳方及び通詞として松木弘安（のち寺島宗則、1832-1893、薩摩藩士、のち渡英、明治政府外務卿）、福沢諭吉（1834-1901、中津藩士の子）などがいる。目的は、開市開港延期交渉、西洋事情探索であった。

次いで明治新政府による1870年（明治３年）のヨーロッパ派遣である。一行は、大山彌助（巌）（1842-1916、薩摩藩士、のち陸軍大将・元帥）、品川彌二郎（1843-1900、長州下級藩士の子、のち内相、長州）、中浜万次郎（1827-1898）ら、７名であった。目的は、普仏戦争視察であった。アメリカ、イギリス経由でヨーロッパの地を踏む。通訳として同行した中浜だけは、病のため、イギリスから帰国した。なお、品川は、プロシアに残り、ドイツの情勢を研究ののち、1876年（明治９年）帰国した。

最も画期的なのは、新政府による岩倉使節団である。1871年（明治４年）から1873年（明治６年）まで、アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスを歴訪した。正使は、右大臣岩倉具視（1825-1883、京都出身）、副使は、参議木戸孝允（1833-1877、長州藩士）、大蔵卿大久保利通（1830-1878、薩摩藩士）、工部大輔（たゆう）伊藤博文（1841-1909、周防国出身、長州藩士）、外務少輔（しょうゆう）山口尚芳（ますか）（1839-1894、肥前佐賀藩士）、以下、多くの官員が参加した。津田梅子（1864-1929、父は旧幕臣、江戸出身）ら留学生も同行、総勢100名を越えた。条約改正準備交渉や海外視察などが使命であった。木戸、大久保らの眼には、新興国ドイツ帝国が、国家形成のモデルと映った。

5　幕末から明治初めの海外留学―オランダ、ドイツ[11]

まず西周（1829-1897、石見国津和野藩出身、父は藩医）である。1841年（天保12年）藩校養老館において蘭学を学び、1857年（安政４年）には、蕃書調所において教授する立場となっている。1862年（文久２年）幕府により留学生としてオランダに派遣される。1865年（慶応元年）帰国。開成所教授、帝国学士院長、貴族院議員などを歴任した。1883年（明治16年）獨逸学協会学校初代校長に就任したが、西のドイツ語は、もちろんオランダ語から入ったものであり、独学だったと言われている。わが国で最初に西洋哲学を組織的に紹介し、三育（知育、体育、徳育）を提唱した。

次いでドイツへの留学生の主なものである。

青木周蔵（1844-1914、長門国厚狭郡生まれ、長州藩医）は、1868年（明治元年）から1874年（明治7年）にかけて、官費でドイツ留学した。駐英公使、外務大臣などを歴任、獨逸学協会第2代委員長として活躍する。留学生、外交官として、滞独生活25年にも及ぶ。

北白川宮能久親王（1847-1895）は、官費にて1870年（明治3年）から1877年（明治10年）までドイツ留学、帰国後、獨逸学協会初代会長に就任する。のち、陸軍中将、貴族院議員を務める。

桂太郎（1847-1913、萩出身、長州藩士）は、1870年（明治3年）から1873年（明治6年）までドイツ留学、当初は私費で、のち官費となる。獨逸学協会学校第2代校長を務める。陸軍大臣、総理大臣を歴任した。

品川彌二郎（1843-1900、萩出身、長州藩士）は、すでに述べたように、1870年（明治3年）から1876年（明治9年）まで、官費生として、ドイツ留学、フランス、イギリスにも滞在する。帰国後、獨逸学協会第初代委員長、その後駐ドイツ公使、内務大臣を歴任した。

山脇玄（1849-1925、福井藩医の子）は、1870年（明治3年）から1877年（明治10年）まで、官費生として、ドイツ留学、法学等を学ぶ。帰国後、獨逸学協会学校幹事として、校長西周を補佐する。行政裁判所長官、貴族院議員を歴任する。

平田東助（1849-1925、米沢藩医の子）は、岩倉使節団に随行して、1871年（明治4年）から1876年（明治9年）までドイツに留学する。当初はロシア留学の予定であったが、青木のすすめで、ドイツ留学に切り替えたのであった。帰国後、獨逸学協会第3代委員長、農商務大臣、内務大臣、内大臣を歴任した。

西と桂を除き、みな5年以上の長期留学者である。西の場合は、留学前にすでにオランダ語を十分に学んでいた。そのため留学を3年で終えることができた。桂は勉学を途中で断念し、3年で帰国している。その他の5人、青木、北白川宮、品川、山脇、平田は、留学前にドイツ語をほとんど学んでいない。そのため必然的に留学期間は長くなってしまう。語学の勉強と留学の当然の関係である。

6　明治初めのドイツ語教育

官立の教育機関は、制度改変が甚だしい。煩瑣を和らげるため、以下に列挙する。[12]

開成所（幕府創設）→開成学校→明治２年（1869年）大学南校→明治４年（1871年）南校（大学が廃止されて、文部省が設置された）。

医学所（幕府創設）→医学校→明治２年（1869年）大学東校→明治４年（1871年）東校（大学が廃止されて、文部省が設置された）。

明治５年（1872年）学制改革。

南校は第一番中学と改称、さらに開成学校と改称、同校は中学と大学の中間に位置する専門学校、規定により外国人教師による直接教授法によって授業を行う。

明治７年（1874年）開成学校→東京開成学校。

同様に大学東校→東校→医学校→東京医学校。

明治６年（1873年）第二番中学を獨逸学教場と改称、外務省設立の語学所（ドイツ語、ロシア語、中国語を教えた）が外務省から文部省に移管。

同年、開成学校の語学生徒の部と獨逸学教場と語学所が合併して、東京外国語学校創設。

東京外国語学校の修学年限は、５年（下級語学３年、上級語学２年）。

明治７年（1874年）東京開成学校と東京医学校は併合して、東京大学となる。

当時のドイツ語辞書、教科書の様子は、次の通りである。[13] 1872年（明治５年）頃には、不十分ながら、独和・和独辞典も出来つつあった。また1871年（明治３年）には、ドイツ語教科書『最初のドイツ語講義』（大学南校版）と『大学南校の上級クラスのためのドイツ語読本』（大学南校版、編者は大学南校ドイツ語教師ヤーコプ・カーデルリ Jacob Kaderly）が完成している。

明治初期の東京の私立ドイツ語教育機関のうち、特に重要なものを紹介する。[14]

進文学社[15]は、1872年（明治５年）開設で、校長は、香川県史族橘機郎（はたろう）であった。生徒数135人、教員数12人（うち外国人教師は２人、ドイツ語担当者と英語担当者が１人ずつ）であった。東京に出てきて間もない森鷗外（1862-1922、石見津和野生まれ、1884-1888ドイツ留学）が、ここで日本人教師とドイツ人教師アードルフ・ヘルム Adolf Helm（1843-1889）からドイツ語の手ほどきを受けている。

最大規模を誇ったのは、獨逸学協会学校である。[16] まず1881年（明治14年）９月18日、ドイツに国家の近代化を学ぶ目的で、獨逸学協会が誕生する。初代総裁はドイツ長期留学経験者である北白川宮能久親王であった。これを母体にして、1883年（明治16年）10月22日獨逸学協会学校が創立される。初代校長にオランダ留学３年の西周をいただき、三育（知育、体育、徳育）を進める。設

置願によると、生徒数300人、教員数は、定員なし、当分は7人であるが、開学時は15人で、全員日本人であった。ただし、1884年（明治17年）と1885年（明治18年）には、教員数18人、うち日本人14人、ドイツ人4人となっている。協会学校は、獨逸学協会委員長である品川彌二郎を先頭に立てて、特に明治20年代の前半に発展した。日本は近代国家の確立と国家社会の安定および産業革命の進展を見せる。伊藤博文（1841-1909）や山県有朋（1838-1922）の指導するドイツを範とする路線が定着。吉田松陰の愛弟子品川彌二郎を頭とする獨協は、長州閥系のメリットを受けて発展した。世にドイツ語の獨協といわれ、旧制一高への登竜門となる。

鷗外が使用していた教科書は、詳らかにしない。辞書は、ニューヨーク市立大学元ドイツ語・ドイツ文学教授G.J.アードラーの独英辞典であったことがわかっている。[17]

獨逸学協会学校における開学時のドイツ語教科書は、ボック著『第一読本』1冊　出版地・出版年不詳、ヘステル著『第二読本』1冊　出版地・出版年不詳、ヘステル著『第三読本』1冊　出版地・出版年不詳、平塚定二郎著『獨逸文法楷梯』前編、後編　東京　1883年（明治16年）であった。平塚は、東京外国語学校卒で、協会学校設立からの教員である。[18]

7　明治中葉期からのドイツ語教育

1886年（明治19年）、教育制度改革のため、高等中学、帝国大学、師範学校が設立され、東京外国語学校は廃校となった。その後1894年（明治27年）高等学校令の発布により、高等中学は高等学校と姿を変えることとなる。また外国語学校は、1897年（明治30年）、高等商業学校に附属する機関として再興される。[19]

この間、獨逸学協会学校は、ドイツ語教育を担う機関として、明治20年代の中葉から急速に発展を遂げる。ドイツ学者大村仁太郎（じんたろう）（1863-1907、幕臣の子、東京外国語学校卒、1901-1903ドイツ留学）[20] が、学校経営と教育指導の中核となる。大村は、1893年（明治26年）獨逸学協会学校幹事となり、1903年（明治36年）以降校長として「獨協教育」を確立する。知育、体育、徳育の三育にわたり、獨協生を育成する。ドイツ語受験の特典を生かし、世に知られる進学校となる。天野貞祐（1884-1980）は大村の薫陶を受ける。また大村は、学習院と獨協で教育に従事し、日本におけるドイツ語学研究の水準を高める。彼は、近代ドイツの思潮と教育実践をわかりやすく紹介し、家庭と父母それぞれの役

割、教師の真摯な姿勢、青少年への深い愛情と広い配慮の三つを強調した。

大村は、1894年（明治27年）、同僚の2教員と共に、『獨逸文法教科書』を発刊した。2教員とは、山口小太郎（1867-1917、幕臣の子、東京外国語学校卒、獨逸学協会学校教授、東京外国語学校教授、1900-1903ドイツ留学）[21] と谷口秀太郎（1863-1937、三重の人、代々家業は医者、東京外国語学校卒、獨逸学協会学校教授、第一高等学校教授、学習院教授、獨逸学協会学校教頭）[22] のことである。これは「三太郎文法」とも呼ばれ、ドイツ語ばかりでなく、欧米語学テクストの標準書ともなり、70版以上を重ね、数十万部を刊行した。[23]

1907年（明治40年）大村校長没。[24] 協会学校もドイツ語教育も転機を迎える。

8　その後のドイツ語教育

すでに述べたように、1894年（明治27年）高等学校令の発布により、いわゆる旧制高等学校が、第一から第五まで設置された。これは1948年（昭和23年）に廃止されるまでに、その数は39校となっていた。旧制高等学校での外国語は、英語、ドイツ語、またはフランス語であった。[25] また1899年（明治32年）高等商業学校附属外国語学校は、東京外国語学校と改称され、高等商業学校から分離独立した。[26] この時以降、ドイツ語教育の中心は、旧制高等学校と東京外国語学校に移る。

ただこのいずれにおいてもドイツ語教育を受けることなく、ドイツ語学者となり、斯界に優れた足跡を残したきわめて特異な人物がいる。ドイツ語のみならず、フランス語、英語、ラテン語、ギリシア語にも通じていた関口存男（つぎお）（1894-1958）である。[27] 関口は、姫路市にて陸軍主計大尉関口存啓（そんけい）の子として生まれる。旧制姫路中学入学、2年で退学して、大阪地方幼年学校入学、東京中央幼年学校本科を経て、陸軍士官学校卒、陸軍少尉任官、病気により休職、退役、上智大学哲学科卒、法政大学予科教授、外務省外国語学校教官。戦後、高田・慶応外国語学校、早稲田、慶応大学講師、1955-1958年NHKドイツ語初等講座担当、ドイツ語文法、読本教科書、参考書、研究書多数執筆。ドイツ語、フランス語からの翻訳を手がける。

このような関口のドイツ語との出会いは、1908年（明治41年）大阪地方幼年学校入学の時である。ABCを教わり、発音の概略を済ませ、自分で辞書を引けるようになった頃、ある日、こいつをものにしてやると決心する。すると日曜日にすぐに、大阪心斎橋通りの丸善にでかけ、ドストエフスキーの『罪と罰』のドイツ語訳（レクラム文庫）を購入する。ひたすら音読、2年かけて読むと、

わかり始める。あとは、ひたすら「くそ勉強」・・・。

生涯一度もドイツの地を踏むことなく、読み、聞き、書き、話す4つの能力を身につけた。

9　ドイツ語習得方法の変遷

すでに述べたことだが、幕末の市川兼恭、加藤弘之ともに蘭学からはじめ、ドイツ語は独学であった。西周は蘭学からはじめ、オランダに約3年留学している。[28] 徳川幕府も倒れ、新しい世に変わると、明治4年までに、青木周蔵、北白川宮能久親王、桂太郎、品川彌二郎、山脇玄、平田東助が、次々にドイツ留学に出発したが、在独3年の桂を除いて、皆5年以上の長期留学である。彼らは留学以前にドイツ語をほとんど学ぶ時間がなかった。そのために必然的に留学期間は長くなる。明治17年（1884年）に留学した森鷗外は約4年、明治33年（1900年）の山口小太郎は約3年、明治34年の大村仁太郎は、約2年のドイツ滞在である。彼らは、いずれも出発前に十分なドイツ語教育を受けている。それは日本人教師と外国人教師からであった。教師の数は、日本人教師の方が断然多い。この時期にあって、大村仁太郎と同じ年の谷口秀太郎の留学経験はない。時代が少し下り、1894年（明治27年）生まれの関口存男も、留学経験はない。ちなみに夏目漱石（1867-1916）は、1900年（明治33年）5月から1902年（明治35年）12月まで約2年7か月イギリスに留学している。本来ならば、もう少し長く滞在のはずが、神経衰弱のため帰国が早まった。

このように見れば、ドイツ語学習は、第一に独学から始まり、第二に5年以上の長期留学となり、第三に日本人と外国人による教育と、可能であれば、3年を標準とする留学を加味することとなった。

さて、明治も後半に入った頃の外国語学習状況がわかる記録がある。鷗外は1899年（明治32年）2月、第12師団軍医部長として小倉に赴任し、1902年（明治35年）3月東京に転勤になっている。東京に戻る際の送別会（3月24日小倉偕行社）において、「洋學の盛衰を論ず」と題する講話[29]を行った。鷗外は言う。洋学衰退の兆しが見られるのは事実である。しかしまだまだ西洋諸国に学ぶべきことはある。外国語学習が今後ともますます隆盛になることを希望する。外国語を単に交際の道具としてだけではなく、外国学を研究するためにも用いて欲しい。また外国語に通ずるものは、会話と読書の両方を身につけて欲しい。

漱石にも、1911年（明治44年）に発表された「語学養成法」と題する談話[30]がある。英語力の衰えた原因は、日本の教育が正当な順序で発達した結果であっ

て、当然のことである。自分たちが学問をした時代は、英語の時間はもちろん、その他の学科も皆外国語の教科書で学んだ。

> 従つて、単に英語を何時間習はると云ふよりも、英語で総ての学問を習ふと云った方が事実に近い位であつた。即ち英語の時間以外に、大きな意味に於ての英語の時間が非常に沢山あつたから、読み、書き、話す力が比較的に自然と出来ねばならぬ訳である。[31]

しかし現在では、英語の教授以外には、出来るだけ日本語を用いるようになったので、現今の語学力の減退は自然な流れである。ではその改善策は、時間、教授法、教師の三つの点である。時間はこれ以上増やすことはむずかしい。教授法も、適当な教師がいなければ、始まらない。しかし現在では優秀な教師は少ない。このように三点ともだめである。しかし一つだけ方策がある。新たに教師を養成することである。その後二年に一度ずつ文部省で、教師に試験をする。そして日頃から勉強してもらう。そうしておいて新たに教科書を整備する。外国の新聞を基礎にし、単語、語句、事柄を統計的に処理し、頻度の高いものを使う。科学的に秩序立った系統の元に、教科書を編成する。こうして教師、教科書を整備した上で、時間数を出来るだけ多くする。しかも文法、会話、訳読、作文、読み方をそれぞれ独立した科目として取り扱うのではなく、すべてを有機的に統一して教授する。たとえば一つのクラスを一人で担当して、融通を利かせて授業する。

> 要するに目下の必要は教科書編成と教員の養成及び改良である。[・・・]話が教へる方の側ばかりに成つて、つい教はる生徒の方に及ばなかつたのは遺憾であるが、余り長くなるから是で止める。[32]

漱石は、英語教師をしていただけに、その意見には、教科書編成の際の単語等の統計処理や生徒の側への目配りへの言及など、現代にも通じるものがある。

10　外国語修得の道

さて、外国語修得の道とは何なのか、ここでまとめて考えてみる必要がある。渡辺照宏のような「根気と努力」なのか、雨森芳洲のような「あくことなき勉学と不断の努力」なのか、幕末から明治初めの頃の「長期留学」なのか、「優

れた教育機関」なのか、「三太郎文法」のような「よき教科書」なのか、大村仁太郎のような「真摯な姿勢を持つ教員」なのか、関口存男のような「くそ勉強」なのか、いったい何が最善の道なのであろうか。

外国語の大家たちに共通の点とは「勉強」と「努力」である。ただし修得には「こつ」がある。多くの経験談と修得方法の提案があるので、それから引き出すことも可能である。それに昨今の外国語学習の科学的研究をも加味することも有効である。白井恭弘はその著書の中で、次のように述べる。第二言語習得研究の結果わかってきた重要なことは、外国語のメッセージを理解するインプットが、言語習得をすすめる上での必要条件である。インプットによって第二言語の音声、語彙、文法の自然な習得がすすむ。形式的正しさよりも、メッセージの意味を理解することを重視した学習が重要である。[33] インプットが言語習得の必要条件であることは、第二言語習得の研究者の間で意見の一致が見られる。アウトプットに関しては、議論が分かれる。しかし重要なことは、アウトプットには、自動化の作用がある、ということである。自分の知識を取り出して、それをうまく順番につなげて文をつくるのは、大変なことである。文法の知識なり、単語なり、すばやく取り出して言えるようになるには、やはり話す練習が効果的である。[34] 白井の結論は、以下の通りである。まず外国語学習の成功は、主として、学習開始年齢、適性、動機付けによって決まる。したがって学習開始は早いほうがよく、動機付けを高める、自分の適性にあった学習方法をとることが必要である。[35] ただし白井自身も言うように、「外国語は母語を基盤に習得される」[36] ので、学習開始年齢に関しては、母語の習得との兼ね合いを丁寧に考える必要がある。さらに白井は続けて言う。

> 外国語は母語を基盤に習得されるので、母語の知識は最大限に生かし、また邪魔になる部分を最小限にすることが重要です。母語と外国語が違う部分が学習の邪魔になりやすいので、そのような部分を、第二言語のデータベースを増やすことで克服しなければなりません。そのための最も重要なメカニズムは「インプット理解とアウトプットの必要性」であり、さらにそれを例文暗記などによって補足していくことも重要です。[・・・] インプット理解と、意識的学習の自動化という両方のプロセスを最大限に生かすことが外国語学習の成功のカギとなります。[37]

外国語修得の「こつ」を、もう少しわかりやすく言えば、「門前の小僧習わぬ経を読む」、「音読、つまり体で覚え込む」、「インプット」から「アウトプッ

ト」へ、「聞く、読む」から「話す、書く」へ、である。戦後長らくNHKラジオ「英会話」講師を務めた英語の達人松本亨（1913-1979）は、Listen more, speak less. Read more, write less.と言っていたが、アウトプットに対するインプットの優位性に気がついていた。[38]

さて、外国語の大家はいても、天才はいない。いや言葉を換えるならば、天才も努力をしている。外国語修得の例として、やはり取り上げねばならぬのは、ドイツの考古学者・実業家H.シュリーマンHeinrich Schliemann（1822-1890）である。その自伝の中で、語学修得の様子が描かれている。まず英語だが、音読、翻訳、授業を受ける、作文、その添削、暗記、暗唱といった順番ですすめている。この方法で、フランス語、オランダ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、スウェーデン語、ポーランド語、現代ギリシア語、古典ギリシア語、ラテン語、アラビア語を身に付ける。[39]

努力する語学の天才とは、この人のことかと思われるのは、国際的な言語学者・イスラーム学者の井筒俊彦（1914-1993）である。修得した外国語は、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、古典ギリシア語、ラテン語はもとより、さらにアラビア語、ペルシア語、サンスクリット語等々であった。日本で初めてアラビア語原典から『コーラン』の邦訳を完成させた。東洋・西洋いずれの思想にも通暁し、世界的思想家の一人である。[40]

ここからは、より具体的な外国語学習法についての話である。

まずすでに冒頭で取り上げた渡辺照宏の『外国語の学び方』[41]である。Ⅰ「外国語について」、Ⅱ「学び方」、その内容は、「誰でも学べる」、「赤ちゃんの段階から」、「はじめのうちは」、「parrotする」、「ねてもさめても」、「集中主義」、「1日も休まず」、「グループで学習」、「目標を立てる」、「年齢の制限はない」、「やさしいところをていねいに」、「感情をこめて」、「暗記の効用」、「辞書に親しむ」である。Ⅲ「道具立て」、その内容は、「単語の覚え方」、「文法の知識」。Ⅳ「聞き方」、Ⅴ「話し方」、Ⅵ「読み方」、Ⅶ「書き方」、そして最後にⅧ「第二外国語」である。まことに懇切丁寧である。

次に千野栄一（1932-）の『外国語上達法』[42]である。氏は、語学が苦手である、と告白するが、それでもいつの間にか「あなたは外国語が得意だから・・・」と言われるようになっていた。それで、外国語習得には「こつ」があり、「目的と目標」を立てる必要があると述べる。次に必要なものとして挙げるのは、お金と時間、語彙、文法、学習書、教師、辞書である。さらに発音、会話、レアリア、つまり文化・歴史を知ることだという。

英学・英語教育を専門とする斉藤兆史（よしふみ）（1958-）は、英語学習の基礎訓練と

して大切なのは、素読、暗唱、文法、多読である、という。[43] また英語の達人たちの方法として、音読、素読、文法解析、辞書活用法、暗唱、多読、丸暗記、作文、視聴覚教材活用法などを挙げる。[44]

英語教育の専門家である鳥飼玖美子は、『本物の英語力』[45] の中で、英語学習法について、次のように言う。第1に「英語の基礎力」は、発音、語彙、コンテクスト、文法である。第2に英語の学習法は、訳す、スキル、試験、デジタル、映画である。第3に英語の実践は、語学研修、留学、仕事である。

斉藤、鳥飼の方法は、英語と銘打たれてはいるが、英語を外国語と言い換えれば、他の言語にも大体当てはまる。

11 まとめ

17世紀末から現代にかけて、先人たちによる外国語・外国文化の摂取の様子について、主としてドイツ語を中心に見てきた。最初から合理的なやり方は少なく、がむしゃらな勉学が多い。ただ結局のところ、外国語に造詣が深い方々には、細かな差異は別にして、多くの共通点がある。「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」4技能のうち、まず「聞く、読む」から「話す、書く」へ、である。つまりインプット理解を中心に据えながら、同時にアウトプットも行う。もちろん母語の違いなど、個人個人によって状況が異なるので、個人個人がそれぞれに適した勉学方法を工夫・案出することになる。それが学習書であったり、教員であったり、辞書であったり、視聴覚教材であったり、映画であったり、語学研修であったり、留学であったりする。しかし外国語をものにするには、いかなる「こつ」にもまして、語学の達人全員に共通することがある。それは、雨森芳洲、大村仁太郎、関口存男、H.シュリーマン、渡辺照宏、井筒俊彦たちのような、たゆまぬ勉強と一生続く努力に他ならない。

注

1 渡辺照宏 『外国語の学び方』 岩波書店 1962年 第16刷（1973年）。
2 前掲書 287ページ。
3 前掲書 232ページ。
4 同上。
5 前掲書 287ページ。
6 前掲書 ii ページ。
7 上垣外憲一 『雨森芳洲―元禄享保の国際人』 中央公論社 1989年。

8　前掲書　95-96ページ。

9　宮永孝　『日独文化人物交流史―ドイツ語事始め』　三修社　1993年　136-176ページ。
その他、鈴木重貞　『ドイツ語の伝来―日本独逸学史研究』　教育出版センター　1975年も参考にした。

10　宮永　273-291ページ。また、尾佐竹猛（おさたけたけき）　『幕末遣外使節物語―夷狄の国へ』岩波書店　2016年　も参照のこと。岩倉使節団については、特に、田中彰　『岩倉使節団「米欧回覧実記」』　岩波書店　2002年　が、大いに参考になる。

11　宮永　190-193、321-327ページ。
その他、以下の書物を参考にした。
獨協学園百年史編纂委員会編　『目でみる獨協百年』　学校法人獨協学園　1983年。
獨協学園百年史編纂委員会編　『獨協学園史―1881-2000』　学校法人獨協学園 2000年。
獨協学園創立130周年記念事業「記念誌編集部会」編　『獨協百三十年』　学校法人獨協学園 2013年。

12　宮永　303-307ページ。
その他、鈴木　64-69ページも参照のこと。

13　宮永　213-256ページ。
その他、鈴木　86-104ページも参照のこと。

14　宮永　313-321ページ。

15　宮永　323-338ページ。

16　『獨協学園史―1881-2000』　319-361ページ。　また『目でみる獨協百年』、及び『獨協百三十年』も参照のこと。
宮永　314-321ページも参考になる。

17　宮永　333ページ。

18　『獨協学園史―1881-2000』330、348ページ。『目でみる獨協百年』52ページ。

19　宮永　341-342ページ。『獨協学園史―1881-2000』60-64ページ。
東京外国語学校については、東京外国語大学の公式ホームページ http://www.tufs.ac.jp/を参照した。2016年10月 1 日閲覧。

20　『獨協学園史―1881-2000』515-681ページ。また『目でみる獨協百年』、及び『獨協百三十年』も参照のこと。

21　『獨協学園史—1881-2000』693-696ページ。

22　『獨協学園史—1881-2000』702-706ページ。

23　『獨協学園史—1881-2000』63、547-549ページ。『目でみる獨協百年』66ページ。

24　『獨協学園史—1881-2000』604-605ページ。

25　宮永　341-354ページ。

26　東京外国語大学の公式ホームページ http://www.tufs.ac.jp/を参照した。2016年10月1日閲覧。

27　荒木茂雄、真鍋良一、藤田栄編　『関口存男の生涯と業績』　三修社　1967。
池内紀　『ことばの哲学—関口存男のこと』　大修館書店　2010年。
上記2冊が主たる参考資料となる。
その他に、宮永　361-367ページも参考になる。

28　幕末以降のドイツを中心とする海外留学の状況については、以下の通りである。

市川兼恭	1818-1899	蘭学	ドイツ語	独学	
加藤弘之	1836-1916	蘭学	ドイツ語	独学	

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

西　周	1829-1897	蘭学	オランダ留学	1862-1865	約3年留学
青木周蔵	1844-1914		ドイツ留学	1868-1874	約6年留学
北白川宮能久親王	1847-1895		ドイツ留学	1870-1877	約7年留学
桂　太郎	1847-1913		ドイツ留学	1870-1873	約3年留学
品川彌二郎	1843-1900		ドイツ留学	1870-1876	約6年留学
山脇　玄	1849-1900		ドイツ留学	1870-1877	約7年留学
平田東助	1849-1925		ドイツ留学	1871-1876	約5年留学

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

森　鷗外	1862-1922	ドイツ留学	1884-1888	約4年留学
大村仁太郎	1863-1907	ドイツ留学	1901-1903	約2年留学
山口小太郎	1867-1917	ドイツ留学	1900-1903	約3年留学

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

谷口秀太郎	1863-1937	ドイツ留学	経験なし
関口存男	1894-1958	ドイツ留学	経験なし

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夏目漱石	1867-1916	イギリス留学	1900.5-1902.12	2年7か月

29 森鷗外　『鷗外全集』　第34巻　岩波書店　1974年　221-228ページ。
30 夏目漱石　『漱石全集』第25巻　岩波書店　1996年　391-400ページ。
斉藤兆史（よしふみ）　『日本人と英語－もうひとつの英語百年史』　研究社　2007年　44-48ページを参照のこと。
31 『漱石全集』第25巻　391-392ページ。
32 『漱石全集』第25巻　400ページ。
33 白井恭弘　『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』　岩波書店　2011年　134-135ページ。
34 前掲書　147-149ページ。
35 前掲書　182ページ。
36 同上。
37 前掲書　182-183ページ。
38 前掲書　149ページ。
39 Heinrich Schliemann: *Selbstbiographie bis zu seinem Ende vervollständigt.* Hamburg: Severus Verlag 2015, S.17-28.
シュリーマン　『古代への情熱－シュリーマン自伝』　関楠生訳　新潮社　1977年　改版　2014年　31-48ページ。
40 井筒俊彦　『井筒俊彦著作集』　全11巻・別巻　中央公論社　1991-1993年。
41 注１を参照のこと。
42 千野栄一　『外国語上達法』　岩波書店　1986年。
43 斉藤兆史　『日本人に一番合った英語学習法－明治の人は、なぜあれほどできたのか』　祥伝社　2006年。
44 斉藤兆史　『英語達人塾』　中央公論新社　2003年。
45 鳥飼玖美子　『本物の英語力』　講談社　2016年。

Fremdsprachenlernen und Kulturrezeption in Japan mit Fokus auf das Deutsche

Tomoyuki UMEZAWA

Dieser Aufsatz behandelt den Zustand des Fremdsprachenlernens und der Kulturrezeption vom Ende des 17. Jahrhunderts bis zur Gegenwart in Japan.

Am Anfang arbeiten fast alle Fremdsprachenlernenden vor Eifer glühend und erzielen oft schnell große Erfolge. Aber viele kommen allmählich zu der Überzeugung, dass Zuhören, Lesen, Sprechen und Schreiben zwar eine große Rolle spielen, aber insbesondere das erste und zweite von zentraler Bedeutung sind, d.h. die Betonung wird mehr auf Input und weniger auf Output gelegt.

Die Voraussetzungen der Sprachlernenden sind individuell verschieden, was Muttersprache, Lebenslage, Vorbildung usw. betrifft. Deshalb ist ihre persönlich individuell passende Methede zu finden. Dies kann Lehrwerk, Lehrer, Wörterbuch, interkulturelle Medien, Sprachausbildung oder Auslandsstudium einbeziehen.

An Meistern der Sprachen, die den Dreh heraushaben, Fremdsprachen erfolgreich zu erlernen, wie Hoshu Amenomori, Jintaro Ohmura, Tsugio Sekiguchi, Shokoh Watanabe, Toshihiko Izutsu und Eiichi Chino, können wir etwas Wichtiges erkennen: Die unumgängliche Voraussetzung dafür ist, wie all diese Personen ausnahmslos zeigen, das ganze Leben lang kontinuierlich mit Mühe und Eifer weiterzulernen.